

禪に親しむ

北野

大雲

はじめに

ここには禅に少しでも親しんでいただけよう、私が「面白い」と感じた禅者の話を拾いあつめてみました。そして、それらの話に対して自由にコメントを付け加えてみました。

ただし、いま「面白い」と言いましたが、それはただの面白さを言うのではなく、そこに智慧の輝きのようなものが見られて、それが私たちの隠れた知性を刺激する、そういう「面白さ」を言います。

そういった禅者の言葉や行動は「悟りの智慧（般若）」に裏打ちされていますが、その智慧は吹毛剣すいもうけんにたとえられます。吹毛剣と言いますのは、毛を吹きかけますと毛が切れてしまうほど鋭い名剣のことです。ですので、ぞんざいに扱いますと大怪我をするかもしれない危険なものでもあります。取り扱いには注意をしなければなりません。取扱書（コメント）の必要なわけがここにもあります。

禅者の言行はそういう危険性を含んでいますので、また「毒」にもたとえる

ことができます。毒も薬になります。それにはやはりしっかりした処方箋（コメント）が必要になります。私のコメントがそういうものとして役立ち、生きた真正の禅に親しんでいただく手引きとなれば喜ばしいことだと思えます。

なお各話の冒頭や本文で引用しました文章は出典を記してはいますが、読者の便を考えて読みやすくするために、原文を訓読・意識したり、概要にとどめたりし、必ずしも原文通りでないことをお断わりしておきます。

本書の出版に際し、禅文化研究所主幹の西村恵学氏にいろいろとお世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

平成二十八年四月

北野 大雲

目次

はじめに

毒語

I

第一話 君たちはわかるのかね（大拙）…………… 3

賊馬ぞくばに騎のって賊を趕おう／脚きゃつか下を照顧しやうこせよ／「お前は慧超えちやうだ」／已事こじを
究明する

第二話 知つとるなら尋ねるな（仙厓）…………… 7

三昧さんまいの言葉は意味を超える／「間違まちがっておらん！」

第三話 まだ娘を抱いているのか（坦山）…………… 11

坦山の豪傑話／不淫欲戒と執着心

第四話 神様はどこにおられるか（精拙）……………17

神仏の在所／「北海道の馬が草を食べると、台湾の牛の腹がふくれる」

第五話 それ、ちゃんと手がつけられるじゃないか（正受）……………22

正受老人と白隠禅師／禅は理屈ではない／東洋的無の特色

生しよ死じ

27

第六話 死にともない、死にともない（仙厓）……………29

気張るだけが禅ではない／「死にともない」も立派な遺偈／蛻たひけた言葉
／「と、いったものさ」／「死にともない」は禅僧好み？

| | | |
|------|--|----|
| 第七話 | グッドバイ、ジヨン（大拙）…………… | 36 |
| | 死を脱する方法／植木等の「わかっちゃいるけどやめられねえ」／ 「ノー、ナツシング、サンキュー」／生死（道元の言葉） | |
| 第八話 | 電光影裡、春風を斬る（無学）…………… | 41 |
| | 無学祖元の胆力／山本玄峰老師の迫力／肇法師の偈頌／法師難に遭う ／玄沙、寸鉄の語 | |
| 第九話 | 御用心（二休）…………… | 47 |
| | 無常の風に御用心／人生無常の教え／「危ないのはお前だ」 | |
| 第一〇話 | 悲しいことは悲しい（寸鉄）…………… | 52 |
| | 般若の言葉／「至道無難 唯嫌揀択」／子を失って初めて知る親の恩 | |

- 第一一話 人生の目的は遊ぶことじや（無文）……………59
- 「遊ぶ」の意味／禅的な生き方（遊ゆ戯げ三さん昧まい）／若者の煩悶について
- 第一二話 二人もお嫁さんはいりません（抱石）……………65
- 二人のお嫁さん？／法喜ほろきの妻／仕事が趣味（遊戯）となる生活
- 第一三話 子供の世界は禅の世界（省念）……………69
- 子供はいつも無我無心／子供は小さな宗教者／子供と祖母の対話／公案を生かして使う
- 第一四話 自由党の首領は大聖釈迦牟尼仏である（滴水）……………74
- 禅者の自由／相対的自由と絶対的自由／禅者の絶対的自由／乾坤唯一人／必然即自由

第一五話 なぜ規則を守らねばならないのか(毒門)……………80

規則の主人公になる／問うことが苦悩の元凶／成り切る／「礼拝して
何を求めるのか」

無戒むかい

85

第一六話 戒は破れても戒体は破れない(省念)……………87

禪の戒——無相心地戒／不飲酒戒／情識を折る／無戒の仏教(禪と浄
土教)

第一七話 蛸を食つておらぬ(二休)……………93

頓知と頓悟／一休さんと蓮如上人

第一八話 わしんとこの肉はすべて上等じゃ(盤山)……………98

叉手当胸／古本屋での経験

第一九話 庵を焼く（婆子）

黙雷と峨山

第二〇話 木仏を燃やす（丹霞）

仏像は絶対の無を表わす像にすぎない／だれでも仏像を燃やしてよいわけではない／「平常是道」の真意

経典

109

第二一話 一切経の虫干し（良寛）

お経とは何か／三昧の生活そのものがお経である

101

105

111

| | | |
|------|---|-----|
| 第二二話 | わたしのお経は払拭掃除三昧（省念）…………… | 116 |
| | 作務 <small>さきむ</small> はただの労働ではない／作務が悟りの機縁となる／「仕込み」期 間の必要 | |
| 第二三話 | 剣で臨濟録を提唱する（鉄舟）…………… | 120 |
| | 提唱とは／仏祖による提唱の例／禅は活物 <small>かつぶつ</small> である／鉄舟の意趣 | |
| 第二四話 | 舌を使わずにしゃべれ（鉄舟）…………… | 125 |
| | 円朝、無舌居士となる／勝つと思うな、思うと負ける／意識はわれわれを縛る縄である | |
| 第二五話 | 手を使わずに瓜をわたせ（大灯）…………… | 129 |
| | 大灯の聖胎長養／中国巨匠の例／マチュアリング | |

達道たつどう

133

第二六話 和尚がいるだけで……………135

無は万能の浄化剤である／鈴木大拙の静けさ／無の効能について

第二七話 後ろ姿が説法する(玄峰)……………139

「ホンマモンの名人」／見事な現身説法／達人の所作——無影流

第二八話 世法を嫌うな(白隱)……………144

仏法と世法／戦争に関して

第二九話 君子は財を愛す、これを取るに道をもつてす(月僊)……………148

坊主ぎらい／無愛の愛

第三〇話 くさい話はするな(良寛)……………152

くさい話／悟りくさい話／くさい言句の例／臭気を払う

心地

159

第三一話 心を持ち来たれ（達磨）……………161

心とは／北条時宗の不安／禅と心理学

第三二話 餅はどの心で食べるのか（徳山）……………165

『金剛経』の学僧徳山／三心不可得／老婆にご用心／パウロの場合

第三三話 庭の石は心の内にあるのか外にあるのか（法眼）……………170

三界唯心／法眼の投機偈／血滴々

第三四話 大なるかな心や（栄西）……………175

心は伸縮自在／一本指を立てる

第三五話 心病退治（盤珪）……………179

意識という病／玄沙三種病人／心病の根本治療法

下坐げざ

185

第三六話 お前さんはまさに泥棒じや（紫胡）……………187

「わたし」という妄想／私欲——苦しみの根源／「猛犬にご注意」

第三七話 嫉妬がましい顔などなさるでないぞ（玄峰）……………192

下座行／下座行の功用

第三八話 まつすぐにお行きなさい（山頭火）……………196

「慕直まくりちに去れ」／悟りへの道／「僕の前に道はない」／無心の道／わたしの来た道

第三九話 「円朝」「ハイ」（禾山）……………201

何をどう悟るか／阿難あなんの「ハイ」／「ハイ」は無の反響である

余滴よてき

207

第四〇話 文字の何たるかをご存じない（道元）……………209

料理をすることは雑用ではない／真の文字とは何か

第四一話 白紙の手紙（玄沙）……………214

たった三文字の電文

第四二話 一二三四五（禅の数学）（趙州）……………

218

「まははうちらに寄す、いぢいせいのとらひにかます万法歸一、一歸何処」／はし箸は箸自身をどう摘つまむことができるか

／「一二三四五」

第四三話 馬鹿は死ななきや治らない（無難）……………

224

わたしたちは大馬鹿者である／根本転倒／本物の大馬鹿者（大愚）になろう

◆イラスト

濱地創宗 ◆

第三話 まだ娘を抱いているのか (坦山)

坦山^{たんざん}、壮年のころ同参の僧といっしょに行脚していたとき、ひどくぬかるんだ泥道にさしかかった。折りしも向こうから年のころ十六歳くらいの娘がやってきたが、道が狭くて両方すれ違うにもすれ違うことができず困惑した様子であった。それを見た坦山は気の毒に思い、いきなり娘を抱いてぬかるんでいない道の方に運んでやった。同道の僧は嚴格で方正な人物であったので、坦山のその行為を眉をひそめて見ていたが、少し行ったところで立ち止まって言った。「女人に手を触れるとは、甚だ僧の面目にかかわることじゃ。以後は少し慎むがよからう」。すると、坦山からからと笑っていわく、「お前さんはまだあの娘を抱いているのかね」と。

ここに出てくる原坦山和尚（一八一九—一八九二）は曹洞宗の学僧で、豪僧としても知られています。江戸時代の後期から明治の中頃まで活躍しました。若くして漢学を学び、昌平黌（湯島にあった幕府の直轄学校）で朱子学と医学を修めました。儒者として出発した坦山は、最初は口をきわめて仏教を罵り排撃しました。が、ある時に禅僧と論争して敗れ、禅門に下ることになりました。

坦山の豪傑話

坦山がまだ昌平黌に通っていた頃の話の一つ紹介しておきましょう。坦山はその頃、ある女性と親しくなり、将来結婚することを約束していました。ところがその女性が浮気をして約束を破ってしまいました。坦山の怒りは収まらず、女を殺すつもりでその家に押しかけたのですが、あいにく女は留守でした。部屋の中で待つこと数時間、暇つぶしにたまたま机の上にあった本を手にとってみると、そこに女色を戒める語を発見。それを見て坦山は猛然と反省し、二度

と女の家には近づかなくなつたといひます。

禪僧との論争に敗れた坦山はやがて出家をして、京都で本格的な修行をすることになります。その生活ぶりは、自らの庵を「蝸廬（かたつむり）（蝸の殻のような小さい家の意）」と呼び、自らを「狂翁」と称したところにも窺われますように、住まいは「方六尺（四方六尺）の車上にわずかに雨露を凌ぐべき蓋を設け」ただけの貧しいものであり、性格は「磊落にして、眼中、権貴なし（あけつぴろげで、心中に偉ぶつたところなし）」で、仏道に関することであれば、たとえ関白であっても相手を罵倒する勢いでありました。

こんなことで到底京都に居れなくなつた坦山は、やがて江戸に帰ることになります。江戸に帰つても生活の当てはありませんでした。そこで、浅草の小さな小屋で八卦見のようなことをして、なんとか糊口を凌いでいました。そんな坦山を見いだしたのは東京帝国大学の初代総長となつた加藤弘之博士でした。お蔭で坦山は、明治十二年（一八七九）に帝国大学ではじめての印度哲学の講師に任命されて仏典を講ずることになりました。そのような縁で加藤の葬儀の際には導師を務めました。その時の法話はすべての列席者の度肝を抜く

ようなものでした。坦山、くるりと列席者の方に振り向くや、雷のごとき大声で「お前らも死ぬぞ！」。

不淫欲戒と執着心

娘を助けた先の話は、坦山が雲水としてまだ修行中であつたときのものです。しかし、壮年の雲水にして、あのようにカラカラ笑いながら相手をギャフンと言わせることができたわけですから、坦山の道力はすでに相当のものであつたと見なければなりません。

この話のポイントは二つです。一つは禪の戒律の問題、もう一つは執着心の問題です。まず問題になりますのは、同行の僧の禪の戒（ここでは不淫欲戒）に対する理解の浅さです。その僧は坦山が娘を抱いて運んだのを見て、坦山が不淫欲戒を犯したと考えたのでした。しかし、坦山は娘を気の毒に思つて止むに止まれず、無我夢中で娘を抱き助けたのでした。つまり無心で娘を抱き助けたのでした。無心ですから、その時は「抱いた」ということもありません。そうである以上、不淫欲戒を犯したことにはなりません。（禪の戒については第一

六話をご覧ください。

坦山について、このようなことが
どうして言えるかと申しますと、そ
れは坦山が同行の僧に非難されて、
「お前さんはまだあの娘を抱いてい
るのかね」と答えたその答えの中に
見いだすことができます。無心之行
為はそれきりの行為として、その蹤
跡（せき痕跡）を後に残すことはありま
せん。この意味で、坦山には先行の
事柄に関して何の執着心（囚われの
心）も見当たりません。坦山は娘を
抱き助けたことをすっかり忘れてい
ました。「お前さんはまだあの娘を
抱いているのかね」と言った坦山の



答えには、「おれはすっかりあのことを忘れていたよ」という口吻を感じ取る
ことができます。

あの僧は偉そうに坦山に説教したつもりでしたが、坦山から逆襲されて、端
無くも坦山のした行為に対する囚われの心がまだ残っていることを思い知らさ
れることになったのでした。それは結局、僧が無心に徹していなかったことを
物語っています。

第五話 それ、ちゃんと手がつけられるじゃないか（正受）

正受老人いわく、「趙州の無をどう見たか」。白隠、「無のどこに手
がつけられましょうか」。すると、老人は指で白隠の鼻をしたたかね
じりあげて、「それ、ちゃんと手がつけられるじゃないか」と、やり
かえした。

（白隠慧鶴『遠羅天釜』）

正受老人と白隠禅師

正受老人とは道鏡慧端禅師（一六四二—一七二二）のことで、信州飯山に草
庵を結んで正受庵と号したことから正受老人と呼ばれていました。日本臨済宗
の中興の祖と目される白隠慧鶴禅師のお師匠さんに当たります。ここに出てい

る話にはつぎのような経緯がありました。白隠二十四歳の時のことです。ある晩、夜坐をしていた折りに遠くから鐘の音が聞こえてきました。白隠はこれを聞いて大悟したのでした。そして、「二三百年來、自分のように痛快な悟りを開いたものはあるまい」、ひそかにそう思いました。そこで、そのことを確かめるために自信满满で、正受老人のいる飯山にでかけて行きました。上掲の正受老人と白隠の問答はその時のものです。「趙州の無（趙州無字）」といひますのは、趙州じょうしゅう 從諗じゅういん 禪師（七七八―八九七）が、「犬に仏性ぶつじょうがありますか」という僧の問いに対して「無」と答えた、その「無」のことです（『無門関』第一則）。

禪は理屈ではない

正受老人の問いは、「お前さんがほんとうに悟ったと言うのなら、趙州の無をどう体得したか、そこのところをはつきり見せてくれ」と言うのです。それに対する白隠の答えが「無のどこに手がつけられましようか」でした。「無」は「何もない」ということです。理屈もてあそとしては白隠の言う通りであるに違いありません。しかし、理屈もてあそを弄ぶことは禪ではありません。禪は生命の具体



的な発露はつろうです。白隠は自分の体得した「無」を理（屈）としてではなく、事（実）として提示する必要があったのです。その点で、白隠の「手がつけられない」という答えは理（論）によりかかったものでした。そこで正受老人は白隠のその答えを奪い、無心で相手の鼻をしたたかねじりあげるといふしかたで、無を具体化してみせたわけです。そこを正受老人は、「それ、ちゃんと手がつけられるじゃないか」と言ったわけです。

東洋的無の特色

禅あるいは大乘仏教でいうところの無は、「虚無こむの会えをなすことなかれ、有無ひの会をなすことなかれ」（『無門関』第一則）とありますように、ニヒリズムの虚無でもなければ、有に對する無でもありません。それは理屈ではない真の智慧（般若）のはたらきを伴う、そういう意味で積極的な無、充実した無です。抱石庵・久松真一居士（二八八九—一九八〇）はそれを「能動的無」と呼び、東洋に特徴的なこの無を「東洋的無」と名づけました。（久松真一については第
一二話も参照）。

東洋的無の特色は無がはたらきとなって現出してくることです。それは生命の躍動とも言えましょう。そこで禅は、先の白隠のようにまだ無の空洞から完全には抜けきることのできないものに対しては、「無をつまんで出してみよ」と、無についての理屈ではなく、その具体的提示を迫ります（「有仏の処、請う、指出して看よ」『塗毒鼓 続篇』「句集」）。そのように具体的にすることによって、無をはつきりさせるためです。それが自由自在にできたとき、その人を初めて禅の人と呼ぶことができるのです。

第一七話 蛸を食っておらぬ（一休）

一休さんは蛸たこが好物であった。ある日、自坊で蛸をたらふく食べた後、檀家に出かけて行き、そこで具合がわるくなって吐いてしまわれた。それを見た檀家の人たちは、「一休和尚は仏様のように思っていました。だが、蛸を召し上がるとは生臭坊主ですなあ」と、嘲り笑った。すると、一休は少しも騒がず、「わしは蛸は食べておらん」と言い張った。亭主が、「口から吐き出したものを食わぬと言い張りなさるか」と、追いつ打ちをかけると、一休の言うに、「浄土教の善導ぜんどうだいし大師は阿弥陀を食べたことはないが、口から阿弥陀三尊が出ていらっしやる。善導さんでさえ、食えないけれども、口から出る阿弥陀様をおさえられない。ましてわたしのような愚僧が、食えないが、口から蛸が出るとは、

さらに仕方のないことじゃ」。

（三瓶達司十禅文化研究所編『一休ばなし集成』）

この話をいわゆる頓知とんちばなしとだけ見てはなりません。禅の立場で見れば、一休さんの主張は間違つてはいないのです。一休さんは蛸を食べても実は食べておられなかつたのです。そのわけは、食するときには食事三昧、食べることも忘れるのが禅者の行き方だからです。禅僧はお酒もよく嗜みます。酒のことをはんじやとう般若湯（智慧の涌く湯）と呼んだりしています。飲むと口が滑らかになるからでしょう。ただし、「酒は量なし」であつても、「乱に及ばず」でなければなりません。酔つぱらつて羽目を外すことは、見ていて格好のよいものではありません。

頓知と頓悟

檀家さんに責められて、一休さんが持ち出した言い訳の部分は得意の頓知の部類に属しましょう。頓知の「頓」は「すぐに、急に、にわか」の意味で、「漸」（よ

《無戒》第一七話 蛸を食っておらぬ（一休）



うやく、しだいに) に対して使われます。禅の世界では、「直覚的に得られた悟り」のことを「頓悟とんご」、「順序次第を経て得られた悟り」を「漸悟ぜんご」といって區別しています。ですから、「とっさの知恵、機知」と説明されるいわゆる頓知は頓悟と似ていますが、普通の場合、頓知が有心から出た知恵であるのに対して、頓悟は無心から出た直接智(直覚)である点において決定的に違っています。

一 休さんと蓮如上人

善導大師ぜんどうだいし(六一三—六八一)は中国、唐初の僧で浄土教の大成者です。日本の法然・親鸞に多大の影響をあたえました。善導はもちろん阿弥陀を食べたことなどはありませんでしたが、口から自然に「南無阿弥陀仏」と念仏が出たという意味です。一休さんは浄土真宗の中興の祖である蓮如上人(二四一—一四九九)と親交のあったことが知られています。一休さんの善導大師への言及にはそのような背景も考慮に入れておいてよいのかも知れません。一休さんには、

わけのほる ふもとの道は おほけれど

おなし高ねの 月をこそ見れ

という歌にも示されていますように、宗派に囚われない寛容の心がもともとあつたようです。

一休さんの「蛸を食っておらぬ」の話に因んで、一つ公案を引いておきましょう。

「或庵わくあん曰く、西天さいてんの胡子こし、甚なんに因よつてか鬚ひげ無なき（達磨さんにはどうして鬚ひげがないのですか）」（『無門関』第四則）。さあ、皆さんはどう答えますか。